せたかむい

発行・古平町史編さん室
文化会館 ☎42-2590
第207号・平成18・12・1

年表で読む古平の歴史

[112]

林業

◇製材販売業

明治以前の一般住宅では、丸太をそのまま使用することが多かったが、その後、マサカリで削ったものが使用されるようになった。角材は木挽き（こびき）により製材され、建網業者、造船業者などは常時木挽きを雇い製材していた。

明治四〇年頃、浜町越中庄太郎が木挽きを雇い、木工場を創設し販売した。この頃、港町で外内幸八が木材販売をしていた。

大正二年、浜町梅野清太郎は、木挽き四人を雇い入れて木工場を設置した。原木を購入し製材・販売を始めた。また木工場に付属して手割りの柾（まさ）職人を集めて柾割工場を設置し、柾販売のほか柾葺（まさふき）業も開業した。

この頃、浜町梅津三次郎が木工場を設置し、道内や本州から製材を購入し小売販売していたが、大正八年、浜町の大火で工場が焼失し廃業した。

大正一〇年一〇月、電気が開通し、動力としてモーターを利用した工場が設置されるようになった。同年一一月、港町に古平製材株式会社が創立された。

古平製材株式会社

本社　古平町大字港町五番地

目的　木材の賃挽き及び製材の販売並びにこの事業に関する一切の事業

設立　大正一〇年一一月一二日

資本　資本金　金拾万円

一株五〇円

役員　取締役社長　藤沢勇蔵

専務取締役　越中庄太郎

取締役　高野常吉

外内幸八　幾井誠七

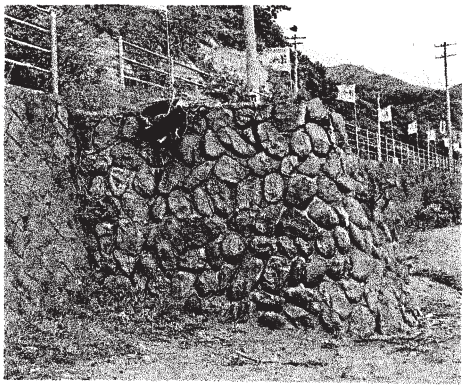
監査　梅野清太郎

小野勝治　伊藤健吉

この会社は、工場を港町に新築し、丸のこ運台式で、北後志唯一の木工場であった。この年は第一次世界大戦後の経済恐慌から木材界は振るわず、倒産が相次ぐという状態であったが、会社は順調に進展し、その後、海岸から木材を直接運び入れる起重機を設置した。

昭和になってからは鰊漁が振るわず、町内での需要も減ったことから経営は極度の不振となり、株価もついに一株八円にまで暴落してしまった。

その不振を挽回することができずに、昭和五年七月二六日ついに解散に追いこまれ、工場を閉鎖し建物も解体した。ただ起重機の台座だけが残ったが、古平町内の人はその後もこの附近を「木工場」と呼んでいた。



崩れているが、当時の形を僅かに残す起重機の台座

古平製材㈱の好況に刺激されて大正末、古平橋の浜町側、海岸通りに面した辺りに渋木製材所が開業した。従業員三人に臨時の従業員を雇い、当時は職人が手作業で製造していた柾（まさ＝屋根ふき）を機械で製造していた。機械柾は手割りの柾より安かったが品質が落ちるので、当初の需要は余りなかったという。

その後、中 中村商店がこれを買収して昭和一六年、同じ浜通りの近くに製材所を新設した。

高野名手作さんの日記から
当時の世相を見る
〈118〉

大正十四年
～続き

▼八月一日
学校も今日から夏休みだ、通知簿をもらって来た。文治は全部甲、吉治は乙が二つ、トミも二つだけ、先ずは上等の方だ。祝聖会例会日だが、昨夜二時頃まで起きていて、目を覚ましたら五時を過ぎていた。一時間も遅れたので見合わせた。午後三時頃農園行き、熊さんと草取りをやる。スイカなどこの暑さで一日増しに大きくなったようだ。父、幸治らも来る、エンドウ、キウリなどをもいで帰る。加藤内閣総辞職の後、大命が加藤子爵に下る。延期中の飛行大会が来る六日に決定したとのこと。

▼八月二日
起床七時、この頃は毎日炎天続き、寒暖計八〇度F（二七度C）、畑の作物もこの日照りでひと雨ほしいと言っているようだ。九時頃農園行き、熊さんといっしょにネギ、アジウリ、花の草取り、肥料などをやる。アジウリは沢山なっている。本年初めてだが面白いほどなるものだ。おいしいものを沢山食べられそうだ。昼食後は妻と三人で大根の間引き、炎天だ。七時頃までやり、キウリ、エンドウをもいで帰る。たらい湯に入り気持ちよい。

▼八月三日
起床七時、今朝も朝から炎天、土用中の暑さとしては中くらい、ひと雨あればいいが。午前中、熊さんは薪切りをやる。午後からは私と農園行き。ネギを五畦植付ける。深く掘って植えるのでなかなか骨が折れる。スイカ、アジウリ、ナス、花などに水をやる。炎天続きで水をやるので、作物も生き生きする。キウリをもぎ七時帰る。加藤内閣が成立する。

▼八月四日
起床六時半、今日も相変わらず暑い。農園の方も少しヒマになったので、熊さんと井戸替えをやることにして、七時頃から支度をする。九時頃までには終った。子供達は川尻へ行きゴリすくいをやったが、時期がまだ早いのかそれほど入らなかったそうだ。ムシ暑かったが六時頃から雨が降り出し、その後本降りになる。毎日の炎天で農家では雨を待っていたので、実に甘露の雨だ。これで作物も太るだろう。涼しくて気持ちがよい。

▼八月五日
昨夜来の雨は、実に農作物にとっては甘露の雨だった。この雨で蘇生し元気づくだろう。今暁四時頃にはすっかり晴れ上がり青空が見えていた。六時起床、降ってもよし、晴れてもよし、申し分のない天気だ。熊さんは午前中墓掃除に行く。雨の後はまた暑さがきびしい。明年は亡き母の七回忌だ、それまでに墓標を建てたいが、三、四〇〇円程度でやりたいものだ。飛行大会、明六日と言っていたが、聞けば二、三日延びるとのこと。午後から熊さんと農園の草取りをやる。スイカ、アジウリは大きくなった。

▼八月六日
起床六時半、雨の後は炎暑がきびしい。今日予定していた飛行大会は、修繕の材料が未着なので延期したとのこと、度々の延期で張り合いが抜けたのか、左程の評判がなくなった。正午頃から暑さが殊にきびしく、今年中の最高八五度F（二九・四度C）まで昇る。子供らは川でゴリすくいをし、四時頃バケツに三つもとって来た。早速煮干しにするべく支度をする。あす晴天になれば上出来になるだろう。

▼八月七日
起床五時半、洗面後早々農園行き。アジウリの草取り、大根の間引きなどやる。九時に帰る。よい運動になった。朝のご飯もおいしい。子供らは今日も沢江の川尻にゴリすくいに行き、またバケツに三つもとって来た。午後二時頃から雨が降り出したが、四時頃からは晴れた。今夜は七夕祭り、子供らは柳の枝にチョウチンをつけて歩く。

▼八月八日
起床七時、夜中から雨が降り出したが夜明けには晴れた。朝イカ漁があり、多きは三〇〇、以下一

〇〇ぐらい。イカも大型になり、この分だとひと漁あらん。八平さんのところへ行き、イカ五〇銭買ったら三〇ぱいあった。小樽へ持参するのだ。午後から小雨が降り出し、イカを干したがこれでは困る。入船町寺田から三分ロープ一丸注文があり、自転車で届ける。明日小樽へ行き、明後日は樺太へ行くのでいろいろ準備する。

▼八月九日

今暁四時頃から豪雨があり、盆を覆すような雨だった。朝の七時頃になって晴れたが、雨も降り出したらよく降る。今日は樺太周遊団に加わり、小樽まで行く日だ。支度をして出かけたが幸い雨も上がり海も上ナギになった。末広丸に乗り込み、一〇時二〇分余市着。一一時半に小樽に着いた。ムシ暑いことだ。昼食後用足しに出かける。田に寄り、のち上着など買い求める。㊐などでは盆が近づいたので売り出し中だ。夕食後、中央座で憲政会政談演説会があり聞きに行く。椎熊三郎氏の演説があったが、ずいぶん思い切ったことを言う。一〇時半帰る。雨で道路が悪い。㊐主人も来られている。いよいよ明日は樺太行きだ。一一時休む。

▼八月一〇日

起床六時、五時頃から雨が降り出し空は真っ暗になった。この雨で道路が悪い。雨は八時頃になってようやく止む。朝食後、用足しをして出かける。久に寄り、のち新潟物産館で買い物をし一一時帰る。支店兄さんも岡崎に来られ、三人で昼食をする。㊀主人が共栄丸で来られた。一二時半、洋服に着替えて出かけた。幸い一天雲無き青空、一時船に乗り込む。船は千歳丸、二七〇〇トン余りの最新の客船だ。二時半出帆する。甲板からの四方の眺望は実によろしい。客室も清潔で広く、汽車より楽々だ。雄冬岬をかわし七時半頃に天売岬、利尻富士など見ゆ。日没の景色は何とも言われぬ。夕食もおいしい。シジミ汁、鮪刺身、玉子をかけたドジョウ鍋、ホウレン草のおひたしなどであった。八時から一等食堂でラジオを聞く。初めてのことで珍しい。三等室では活動写真（映画）もあり賑やかだ。一〇時にラジオは終る。浴衣がけで甲板の散歩も楽しい。星は満天に輝いていて明日も晴天ならん。一〇時半休む。

（一一日～一三日は欠）

▼八月十四日

昨夜は樺太豊原の一流旅館・花屋に泊まり、五時に起床した。大急ぎで支度をし、豊原駅六時半発の汽車で小沼に向かう。三〇分ほどで着く。農事試験場へ半里ほど歩く。広いところだ。野菜類のほか、牛馬、豚、鶏、緬羊、キツネまでいろいろといる。緬羊が沢山いて、牧夫と犬（牧羊犬）の指示によって規則正しく飼われているのは、実に見事であった。九時、小沼発の汽車に乗りこみ栄浜へ向かう。沿道の平地は皆荒れていて、雑草のみが生えている。一一時、栄浜に着き、駅から波止場へ向かう。約一里も歩いて待合所で休んだが暑いこと。実に北海道の真夏と変わらない。氷水を飲み、ソバの昼食をし、一二時三〇分栄浜発の汽車で、四時三〇分大泊に着く。種田さんが迎えに出てくれていた。土産物などを買い、大急ぎで乗船する。本船は大泊を六時に出帆した。船中は相変わらず賑やか、船室で活動写真を見る。

▼八月一五日

昨日の午後六時大泊を出帆以来、千歳丸は一路小樽に向かう。午前四時頃には天売、焼尻の島や、利尻富士の英姿が見えた。本船の一番上、船長室から遥か四方を眺望する。景色がよく気も晴れ晴れとする。海は上ナギで実に幸運だ。六時頃から雨が降り出す。船室では相変わらず談笑している。いよいよ今日でお別れというので、各自で住所など知らせて、新年の賀状の交換などすることにした。正午頃には高島岬が見え、船中で最後の昼食をする。おいしくいただき上陸の準備をする。二時、予定通り小樽港へ入港する。大雨で三〇分ほど待ち合わせ上陸する。岡崎で迎えに出てくれていた。岡崎へ行き、いろいろ樺太での話などし、湯に入り夕食後、田へ行く。古平へも電話で無事着いたことを知らせる。

▼八月一六日

昨夜は岡崎へ泊り、六日間の樺太旅行で疲れたのでゆっくり休んだ。起床後、二、三軒用足しをして、九時小樽発の汽車に乗り、一〇時余市着。八蕃目で一六歳の長男が亡くなったというので弔いに行く。波止場に行ったら船は三十分ほど前に出たとのことで、仕方なく二時まで待った。その間、沢町の岩城へ

行き、網、アバ縄などの話をする。二時乗船、上ナギで三時に着く。樺太での話などをし、夜、墓参する。昨日、飛行機はようやく修繕が終り古平から飛び立ったが、本日、小樽を飛行中また故障で、有幌海岸近くに不時着したとのこと、いろいろとケチのつくことだ。

▼八月一七日

長らくの旅行疲れで、昨夜はゆっくり休んだ。就寝中、大謀からアバ縄受け取りに行くとの電話あり、七時に来た。イカも大型になった。板倉に行きアバ縄一〇〇丸、ほか二点、[illegible]倉から改良八〇丸を渡す。[illegible]で休み、樺太周遊団の話をし、一〇時帰る。ムシ暑く暑さもきびしい。裸でも汗が出る。この朝、イカ二〇〇～三〇〇とれたとのこと。午後四時頃、久し振りに農園へ行く。九日ほど見ないうちにスイカ、アジウリなども大きくなった。あちこち見回り、父とトウキビをもぎ六時帰る。食後、堀ビヤホールの一三歳の娘さん死去し通夜に行く。暑いこと蒸されるようだ。

▼八月一八日

起床六時半、今日もまた炎天でムシ暑い。熊さんは農園行き、私は沢江の[illegible]さんへ行き、[illegible]宮岡さんから預かった品物を渡す。老婆は大変喜んでいた。松尾さんと樺太周遊の話をし、九時頃帰る。一〇時、ビヤホールの葬式送りに行く。今日も暑い。樺太で世話になった高橋さん、種田さん、また岡崎姉さんへも礼状を出す。夕方になりようやく少し涼しくなった。

▼八月一九日

起床七時、暑さがきびしい。イカ漁一〇〇～二〇〇ぐらいとれ、道具も少し売れる。今日、土場で競馬会があるので花火が揚がる。競走馬も少ないというので、余り人気も盛り上がらない。暑さはずいぶんきびしい。過般の周遊団にいっしょだった名畑、川上の両氏から礼状が来た。こちらからも出さねばならぬ。今日、トウキビ二円ほど、リンゴ四円ほど売ったとのことだ。

▼八月二〇日

起床七時、谷森川から改良三〇丸入用とのことで、外内へ問い合わせる。三円五〇銭で買い入れ、共栄丸に積み込んだ。佐渡物産へアバ縄照会したら二円五〇銭とのことで、六〇丸注文した。土場で競馬会あり、子供らが見物に行った。夕方、農園へ行く。スイカ、アジウリ大きくなった。二十日盆なので花をとって帰る。夕食後禅源寺へ行き、八月三一日の観音祭りにつき協議する。帰り[illegible]干場の盆踊りを見物して一〇時半帰る。

▼八月二一日

起床七時、今日はよほど涼しく凌ぎやすくなった。昨夜イカ漁あり、一〇〇～多きは四〇〇ぐらいとれたとのこと。トウキビ出盛り、樺太周遊団に参加した四人ほどから礼状が来たので返事を出す。夜、港町の堀さんの息子二三歳で死亡したとのこと、若いのに気の毒なことだ。通夜に行き九時帰る。

▼八月二二日

起床七時、涼しい天気だ。寒暖計も七二度F（二二度C）ぐらいで凌ぎやすい。この日、妻はトミを連れて陸路積丹行き。熊さんもついて行く。正午に出発した。曇り空で暑からず、陸行には申し分ない天気だ。午後一時から、国勢調査の訓練会があるので役場へ行く。支庁の吏員から注意事項などを聞く。私は第五区・旭部落を受け持つことになった。三時半帰る。海は少々時化模様。夜に入れば風も涼しく、コオロギの声も秋らしい。盆も過ぎたので何となく秋を思わせる。

▼八月二三日

起床七時、昨日、妻とトミは積丹へ行ったので、夜、四郎はダハンするかと思っていたが、機嫌よく休んでいた。今朝もおとなしく父や悦三と遊んでいる。曇り空に涼風が吹いて秋らしくなった。樺太周遊団の人から礼状がポツポツ来る。早速返事を出す。熊さん三時頃積丹から帰る。積丹へは割りと早く着いたという。四郎は今日も機嫌よく六時頃休む。コオロギの声も秋らしくなった。

▼八月二四日

起床七時、朝夕は涼しく秋らしい。妻とトミが居らぬので何となくさびしい。四郎はかあちゃんが居なくともダハンすることもなく、悦三と遊んでいる。こんな時は天真爛漫で実に可愛いものだ。午後から父や幸治、子供達四人が農園へ行く。スイカずいぶん大きくなり沢山なった。今月末には食べられるだろう。トウキビをもいで帰り、夜、ゆでて皆で食べる。四郎を抱っこして本へ遊びに行く。話している途中で寝てしまった。若林さんへ電

話して、四郎が機嫌よくしていることを知らせた。今日、野塚の曽我さんから迎えが来て、そこに寄り、これから帰るところだという。

▼八月二五日

起床六時半、朝から照り四、五日涼しかった天気も、また夏が来たようで暑さがきびしい。氷水がほしいようだ。熊さんは農園行き。58号は全部で三〇〇斤ほどよりないので、本年は小売で七銭にする。14号は九月初めには出るだろう。九時頃自転車で新地方面行き。五太郎宅へ香典を届け、大謀で用足しをする。「ヨ」に寄り一〇時過ぎ帰る。七年前に樺太へ行った「ニ」湯屋の姉さんが訪ねて来られた。

▼八月二六日

就寝中、入舛へ行っている妻から電話が来る。四郎がダハンせぬかとのこと、意外にも至極おとなしく、昨夜はソイさんのところへ泊まりに行き、おとなしくしていたと知らされた。実際おとなしい。入舛へ連れて行かなくてよかった。この日も暑い。一〇時頃農園へ間引きの菜をとりに行く。アジウリ大きく熟したのを食べてみたらおいしかった。

▼八月二七日

起床七時、今日も快晴で暑さがきびしい。㊋さんと恵比須神社祭礼の寄付金を集めに歩く。二〇軒余りで六六円集まる。これで責任を果した。幸治、文治をはじめ子供達の一隊は鍋、みそ、弁当などを持って農園行き、どうしているかと一一時頃見に行ったら、板倉の前でこれからだい鍋をやる支度の最中だった。ナスを切るやら、ネギ、イモを洗う者、火を焚く者となかなか忙しい。四郎もおとなしくしている。こんな時代が楽しいものだ。夜、若林さんへ電話をかける。

▼八月二八日

起床六時半、朝夕は涼しくコオロギの鳴く声にも秋らしくなった。朝のうちは曇り空で小雨が降っていたが、だんだん晴れた。熊さんは月末なので書出し配り、五月の残り分だが一向に集まらぬ。こうなると商人は弱いものだ。芝居だ、活動写真だ、お菓子だと言う人でも、五〇銭か一円の借りでもなかなか済まされぬらしい。一〇時頃、妻から電話があり、小雨だがだんだん晴れてくるようなので、正午頃出発するとのこと。熊さんは一一時半頃、早速迎えに出た。三時頃若林さんから電話があり、二時半に出発したとのこと。そうだと、熊さんは小樽茶屋で二時間も待つことになろう。八時頃、美国㊋から電話があり、今美国を立ったとのこと。コノさんと幸治や文治が迎えに行く。家では父と四郎が休んでいる。一〇時、ようやく着く。トミは疲れたとのこと、土産物いろいろと持参した。

▼八月二九日

起床七時、朝夕は涼しいが日中は快晴で暑さがきびしい。積丹帰りの土産物、マンジュウやその他いろいろで子供達は大喜びだ。積丹では大変歓迎してくれたようで気の毒だ。自転車で傘、「ヨ」へ行き、「ヨ」ではしばらく話す。一一時帰る。月末だがさらに入金が無い。もっとも五月の残り分なので仕方ない。午後、妻や子供らは農園へ行き、トウキビ、キウリのうらなり、リンゴなどもいで来る。

▼八月三〇日

起床七時、一日増しに涼風が吹き秋らしい。今朝はイカ大漁、多きは千ぐらい、ほとんどが五〇〇以上とのこと。浜中方面の船では一〇〇～二〇〇のところが多かったとのこと。イカも大型なので近く大漁ならん。明日、幸治は小樽へ戻るのでイカを一円買い、塩と生干しにした。一〇銭に六ぱいだった。イカ道具もポツポツ売れる。夜、沢江土谷老父が死亡したので通夜に行き九時帰る。。明日は観音滝参拝だが、雨にならねばよいが。沖にはイカつけの灯火が沢山見える。ポツリポツリ雨が降り出す。

▼八月三一日

今日は観音滝参拝の日だが、あいに四時頃から雨が降り出した。五時頃、禅源寺の和尚から電話がくる。この雨では参拝できないから順延することにしたとのこと、どうもままならぬ。学生連明日から授業が始まるので、幸治らも今朝小樽へ行く。船は避難したとて見えぬ。仕方なく陸行すべく準備をしていたら、一〇時頃からだんだん晴れナギになってきた。午後一時の外浜丸が出るというのでそれで行った。長い夏休みで遊んだが、明日からまた真面目に熱心にやらねばならぬのだ。夜、また雨になる。米吉じいさんが死亡し通夜に行く。大勢が来ていて二階へ上がる。大往生であった。

〈続く〉

町内の学校探訪

沖尋常小学校

5

◇開校八十周年記念式

昭和三四年五月、皇太子殿下御成婚記念として、余市営林署から落葉松二五〇本を寄贈され旧校舎跡地に植林した。

この年、開校八十周年を迎えることから前年より校庭の整備も行われ、青年団による国旗掲揚塔の設置や、婦人会も加わり桜やヒバなど一二本が校庭に植樹された。そして、一〇月二五日、沖小学校開校八十周年記念式を行った。

沖町はこれまで海上交通にも恵まれていなかったが、昭和三三年、積丹国道が開通したことからこれまでの不便さは一掃され、市街地への利便性も増したことから、卒業生の中学校への通学の苦労も緩和された。

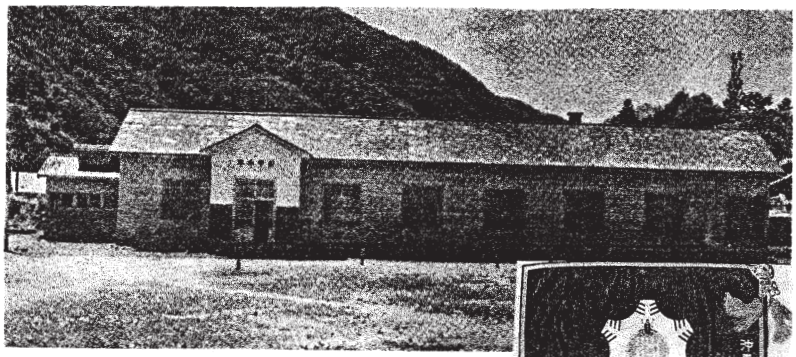
また、これまで飲料水は裏山から引いた沢水を利用していたが、昭和三六年、工費五万三千円余りでモーターによる揚水ポンプを設置し、児童の水飲み場を新設した。

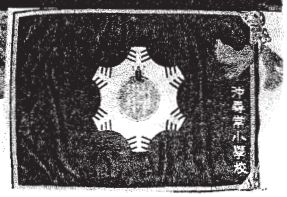
開校記念式の行なわれる前月、古平漁港、沖村川復旧工事の現場を視察に訪れた町村知事が沖小学校も視察し、教師や児童たちに開校記念の祝意を述べた。

◇学校統合により廃校

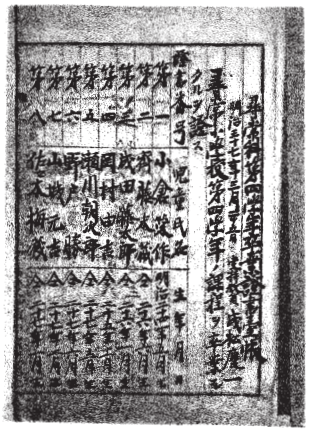
全国的にようやく児童数の減少も見えはじめた昭和三九年、町内の小学校統合を視野に入れて建設した古平小学校が竣功し、沖小学校は明和小学校と共に統合となり、同年八月一四日廃校式を行った。新地分校はその前年、すでに統合し廃校となっていた。

地域での学校の果す役割は多彩で、統合前年の昭和三八年六月三日[日]の学校日誌には、





↑ 昭和28年新築の校舎と校章 →



→卒業証書台帳と第四学年卒業生（当時は四年で卒業）

「朝から雨降りである。小さい子から中学生まで学校へきて遊ぶ子が多かった。十時から十二時までテレビを見せる。中学生はマット運動をしている」とある。

学校統合の目的は単級や複式学級をまず無くすることであったが、北海道教育庁の昭和三八年一一月の調査では、小学校二、三二二校中、五学級以下の学校が一、三一六校あり、総数の五

地方自治の移り変わり

―蝦夷地から北海道へ―

口一・二級町村制

新政府になり北海道の開拓が始まると各地で産業が盛んになったが、地域の問題となると、役人の名前の変わったぐらいで幕府の頃と大した違いはなく、町村の仕組みや権限をみると本州とは大きなへだたりがあった。

ようやく明治三〇年になって北海道区・一級・二級という区町村制が取り入れられ、明治三二年に札幌・函館・小樽が区に指定され、翌三三年、後志管内の寿都・岩内・余市などを含めて一六町村が一級町村に指定された。

北海道の開拓は進んできたが、まだ本州との格差があるということで明治三五年、北海道だけの特別な規則として二級町村制が施行された。これによって古平郡は二級町村（全道で六一町村）となり、郡内の沖村・歌棄村・沢江村・浜中町・港町・新地町・入船町・丸山町・群来村の四村五町を合併して古平町となった。

住所を書くときに古平町大字〇〇町などと書くが、この大字というのは、町村合併をする前の古平郡のときの町村名であることを示している。字というのは、さらにその中の狭い地域の標示で、現在は一般には使われていないが古平町内には一〇〇近く残されている。

口一級町村に昇格

そして明治四〇年には一級町村へと昇格し、これでようやく本州の町村とほぼ同じ権限を持つ町村となったのである。

明治四二年の『古平町治一覧』

戸数	一、三四〇戸
人口	七、七八二人
児童数	一、二九四人

五七％であった。

統合に当っては、全国的に各地で住民の反対や抗議が頻発し難問をかかえていた。古平町では統合特別委員会をつくり、積極的に地域住民との懇談会を開いて理解を求め、統合による不安の解消につとめ、円満の内に期待をこめて町内の学校統合を成し遂げた。

沖小学校は統合と同時に古平小学校沖分教所となり、昭和三九年八月一四日、児童や教員のほか関係者多数が参列して廃校式が行なわれた。

明治一三年八月一三日創立以来、地域の輿望と期待を担って、児童の育成や文化の進展に貢献してきたが、多くの人々に親しまれ惜しまれながら、ここに八四年の歴史を終えたのである。

――沖小学校　終り――

〈学校探訪〉次回は明和小学校

→高台にある旧校舎の校門（行啓記念　昭和十一年建立）

学級編制と在籍数

年度	学級数	男	女	合計
明治三六年	一	三九	二五	六四
四〇年	一	四四	二七	七一
四四年	一	五一	三二	八三
大正　四年	一	四五	四六	九一
八年	二	五二	五〇	一〇二
一五年	二	五一	五六	一〇七
昭和　三年	二	六二	五四	一一六
一二年	二	四五	四一	八六
二〇年	二	二四	三二	五六
二一年	二	一八	二八	四六
三〇年	二	三四	二七	六一
三四年	二	三〇	三二	六二
三九年	二	二九	二六	五五

収入と歳出

二〇、一二四円二七三

町村制が施行されたのは比較的財政に恵まれた町村であって、多くの町村は今までの戸長役場のままであり、大正一二年まで議会もない戸長役場が全道にあった。その多くは人口の少ない道東方面に集中していた。

一級町村となり二級町村と違う点は、町村長は道庁長官の任命だったものが、町村会の選挙したものを長官が認可する、助役を置くことができ、町村長・助役・収入役の任期が二年から四年、役場吏員の人員や給与などについても町村会の議決によることになった。

同年五月町会議員の選挙が行なわれたが、人口による議員の定数は一六人であった。一級町村では納税額によって一級と二級という等級選挙が行なわれ、一・二級とも任期は六年であったが、三年ごとに半数が改選された。

選挙は八名の連記で一・二級は別の日に行なわれ、一級立候補者は二級の選挙にも立候補でき、落選したときは翌日の一級選挙にも立候補できる仕組みであった。

有権者も男子に限り、納税額によって制限があった。一級有権者二二人、二級有権者二五四人であった。

□選挙で町長を選出

第一回町会(町議会)では町長の選挙が行なわれ、高野常吉が一級町村制の初代町長となったが、町長就任には北海道庁長官の認可が必要であった。

町会の議長は町長が務めることになっていて、助役に前町長宮下羊太郎、収入役に幾井誠七が当選した。役場吏員の定員は書記五名、書記補四名であった。

□後志支庁が開庁

明治四三年、それまでの小樽支庁(小樽・高島・忍路・余市・古平・美国・積丹の七郡)、岩内支庁(岩内・古宇・虻田の三郡)、寿都支庁(寿都・磯谷・歌棄・島牧の四郡)を合併し、倶知安村に後志支庁を新設した。この合併は、倶知安村の支庁誘致運動で河島長官に働きかけ、また倶知安村が後志管内のほぼ中心地にあることから実現した。

支庁の設置は第一期拓殖十五ケ年計画によるもので、この年十一月に後志支庁新庁舎で開庁式が行なわれ、これが現在まで百年近く続いている。

初代の支庁長には河西支庁長であった東郷重清が任命され、大正四年まで在職し上川支庁長として転出した。

高野常吉町長は一年足らずで退職し、明治四一年、町会での町長選挙で岩淵三樹蔵が当選し、やがて大正時代を迎えることになる。

後志支庁管内町村図

◆区制＝小樽
◆一級町村制施行＝余市・古平・美国・岩内・磯谷・寿都
◆外は二級町村制施行で、戸長役場はない。

初冬の風物詩

大澤文子

例年になく猛暑が続き床に伏すこと数日。おまけに轟き渡る雷鳴のひびきに灯りもつけず暗い夜々を過した幾日。苦しかった！

「雷が鳴ったらいち早く電気配線のもとをとめるのだよ」

幼い頃より父から言い聞かされていた言葉だった。

その二日後に積丹町の歌びとから、

「雷でねぇ、うちの電話機がこわれてしまったの」

「それにお隣でも電話機とテレビもこわれてしまったのよ」との知らせに驚きの声をあげた。

それから幾日……か、暦は『立冬』を報じた。だがわが小庭をわがもの顔に飛びかう蜻蛉のかげもない。それにもまし、いち早く冬の使者、雪虫が到来し執拗に顔や手にまつわりつき「早く冬支度をしなさいよ！」と耳元で警告を発するはずなのに…。今年は雪虫のかげもない。

何か納得のいかない寂しさを感じるのは私だけではないであろう。

各家庭では、そろそろ冬に備え、漬物、野菜類の貯蔵の支度などに大忙しの日々を送っているはず。

幼い頃の日々を私は新潟市で過ごした。冬近くなると思い出すのは「母と漬物」のこと。毎年、母は近所の親しい主婦連を集め、あまり広くもない庭の一角に生う草原に莫蓙を敷きつめ、共同で漬物の支度に大忙しだった。

店からリヤカーで届けられた土のついたままの大根を、頬かぶりした主婦連と手分けして、水を張った大きな器の中で丁寧に洗い水気を切る。葉を切り落とした大根を一本一本縄で交互に編んでゆくのだった。何の話をしているのか、時折り笑い声も聞こえ楽しそうだったことを今でもフーッと思い出す。

「初冬の風物詩」として懐かしみを覚えるのだった。

現在ではあまり見られない風景ではあるが、たまに目につくこともある。そんな時、ふと母の後ろ姿を思い出し懐かしい。五、六本づつ編みこんだ大根は男手を待ち、日当たりのよい軒下を選み下げるのも大仕事のひとつの様だった。

冬にむかい主婦連の一番大切な、そして大事な仕事の一つであろう。

現在では大根を縄で編み、軒下に下げる干し方は見かけることも少なくなった。

大木の枝や板塀などに無造作に「振り分け荷」よろしく掛け、干してある家々も多くなった。木造の古い家がすくなくなったせいでもあろう。

要はほどよく風に大根の肌をなぶらせ、美味しい漬物に仕上がればいいのだから…。

私も何年か漬物に凝ったこともあったが、今では漬物に手をわずらわせることもない。物置に積みあげておいた幾樽かの箍もゆるみ、始末するはめとなったが…。初冬の懐かしい大根干しも年々減る傾向にあるとか、ある記事に目をとめたこともあったが…。

人の心に訴えるさまざまな思いが初冬にはある。

ふと、数十年前とはなったが時に思い出すさまざまなこと、からになった漬物の四斗樽を波打ち際まで運び、縄で作った束子でごしごし洗ったこともあったが…、あの時は若かったなァ。でも冷たく寒かったなァ。ペンを持ちながらふと口ずさむ私だった。

現在の店頭には、小さな容器に入った種々の漬物が人待ち顔に買い手を待っている。まあとりどりの人生なのでそれぞれの歩み方でいいのでは…と、ひとり合点しつつ夕づく庭面に立っていた。

ふと見上げる灯油タンクの上に、紅葉した桜のひと葉が夕風に揺れていた。

古平と私

六、はやく給食にすべ

葛西庸三

廊下で繋がる大きな建物の中に、役割が異なる「幼稚園」と「小学校」、それに「給食センター」が入っているのが古平小学校の校舎であった。他町村には例がなかった

二階には広くて立派な講堂があった。私が赴任する以前は、よく結婚式場に利用されていたという。

当時の金で二億円もつぎ込み、古平町の将来を見通し、幼児教育・義務教育・そして生涯教育の視点に立った壮大な構想の校舎は、まさに伊藤由松町長の、時代の趨勢を見抜く慧眼から生まれたものだと思う。

さて、同じ建物の中にあっても「給食センター」は独立した施設である。四月には「学校年間行事予定表」、月始めには「〇月行事予定表」を提出し、行事の変更の時にはあらかじめ何日か前に「変更届」を出さねばならない。それが私の仕事であった。

しかし、職員室を出るとすぐ向かいの左側にある「給食センター」が、自分の学校の給食施設のような錯覚に陥る時があった。

心の中にそんな甘えがあるものだから、そして性格がずぼらな私は、学校行事の変更届の提出を忘れることがあった。

栄養士の菅原さんが職員室の左側のドアを細目に開け、顔を半分のぞかせて、

―葛西さん、あしたの給食七〇〇人分を一人で食べなさいよ―

そう言って、さあっと姿を消す。

さあ大変、またも失敗したな、と肝っ玉を縮ませながら恐る恐る給食センターのドアを開け、平身低頭して詫びるのである。

この七〇〇人分を一人で食べなさいよ、という忠告は、心の優しい古平人の気質からきている言葉で、実はちゃんと中止の手続きを済ませてくれているのであった。有難いことだった。

給食のことで今でも瞼に焼きついていることがある。時々思い出してはニヤッとする。

ある年の五月も末のある日であった。

子ども達の朝は早い。休み時間になると急な石段を駆け登ってグランドで遊ぶ。始業のベルが鳴ると走って校舎に戻り、頭から湯気を立てながらうまそうに水を飲む。

その日は一年生のあるクラスの担任が出張で私が補欠に行っていた。

四時間目は十一時三十五分に始まる。子ども達は腹ペコだ。

教室へ足を一歩踏み入れた瞬間、私は思わずアッと小声をあげた。

教室の真中の列の一番前の席に坐っている元気ですばしこく、日焼けした顔の中にきらきら光る眼が輝き、いがぐり頭の愛くるしい一年坊主が、上靴のままの両足を机の上にどんと乗せ、腕を組んでふんぞりかえっているではないか。漁場で働いている大人を小さくした姿であった。

その一年坊主が、私の顔を見た途端、

―先生、腹ったしゃ、早ぐ給食にすべ―

と腹の底から涌き出る声で言った。

やあやあ、すごい見幕で迫力があった。あの小さな体から、大人のような言葉が飛び出したのだ。私は思わず噴き出した。

大したものだ、と思った。こんな経験は初めてであった。

見事な迫力に圧倒されて、

―よし解った。すぐ給食にするぞ―

となりのクラスを気にしながら、おい、静かに用意すれよ、と小声で言いながら準備を始めた。

あれから三十年近くになるから、威勢のよかったあの一年坊主は、三十半ばになっているはずだ。腹ったしゃ、早ぐ給食にすべ、という生活力のある生き方で、逞しい、立派な社会人になっていることだろう。

会ってみたいと思う。

しのび寄る魔の手　1
とくとご注意を

富山市　高橋　藤藏
（元・稲倉石鉱業所勤務）

まさか私が被害者寸前の身になろうとは、ついぞ考えてもいなかったのだが、遂に魔の手がやって来た。

いわゆる「振り込み詐欺」・「手数料詐欺」まがいのハガキが舞い込んだのです。

その内容は

・あなたは「総合消費料金未払い」で通販から民事訴訟が出されている。

・これを放っておくと、裁判所から原告の主張が全面的に認められ、給料・動産・不動産の差し押さえが執行される。

・当局では、訴訟の相談を受けています。

・身に覚えがない場合でも、当方に連絡をして下さい。

・裁判取り下げの最終期日は、本状到着後、三営業日以内です。

となっており、法律・法廷用語で、尤もらしい事が高圧的に書かれていた。

勿論、そのような事実は全くなく、もう一度冷静に読み返しました。

まず疑問に思ったのは

・若し、本当に訴訟されたのであれば、原告会社から事前に私に連絡がある筈。

・給料・動産・不動産の差し押えと執行が、脅迫的な文面で羅列されていること。

・こうして不安を募らせ、訴訟の取り下げを求めていること

・訴訟取り下げ期間が、三営業日以内と極めて短いこと。

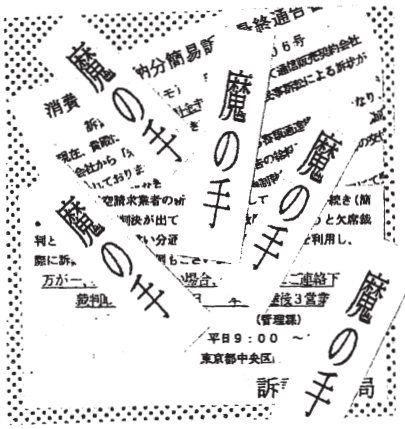
（ちなみに、ハガキの到着が水曜日だったので、三日以内とは水・木・金曜日までとなり、意識的に土・日曜日を外し、考える余裕を少なくしたのではないか）

等であり、更に、国の機構がこのような高圧的な文言を使ったり、取り下げの事まで細々と連絡する事がないと直感した。

直ちに「事実無根」の電話をしようと思ったが、電話をする事によって

「取り下げには、申請料や代行料が必要」

等と、言葉巧みに迫ってくる可能性があり、又、電話をすれば私の電話番号が逆探知され、後々まで尾を引く結果になりはしないか、との疑念が沸いた。



老人を標的にした「振り込み詐欺」の一種に違いないと思い無視する事としたが、とは云うものの、心のどこかに「気がかり」が残り、この際、市の『消費者センター』に相談し指導を受ける事にした。

センターの指導は

・この頃、老人を中心に同様の相談が多く来ている。

・差し出し先の住所には、そのような官庁や法人は存在しない。行政にもそのような機構はない。

・法務省や裁判所の正式文書以外は信用しない事。

・相手に連絡をすると、第二・第三の魔の手が待っているので、「無視」するのが一番。

・こちらで連絡しなければ、相手からの再連絡は来ないだろう。

との事で、指導のとうりに無視し、相手がどう出るかを待つ事にした。

（続く）

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

橘　義春［遺稿］

八月十九日［晴］

武装解除となり下山

ソ連軍の捕虜となる

それにしても今度の場合は全く不可解だった。なぜ武装解除を受け捕虜にならなければならないのか。われわれは何もソ連軍に降参したわけではないのだ。そんな思いだけが強かった。

『常に郷党家門の面目を思い、生きて虜囚の恥ずかしめを受けず』とは、先陣訓の一節にあるが、これから集団で捕虜になるのだ。何ともやり切れないがこれも上からの命令である。

〈この疑問は、捕虜になって上敷香の元兵舎へ行ってから解けた。私達兵隊には日本が八月十八日に終戦になり、無条件降伏したことを知らされていなかったので、誰でもこのような疑問を持っていたのである〉

玉砕という極限から、生きる喜びを得たという安堵感は誰にも隠せないものがあった。なにかしらほっとした反面、これからの先行きは一体どうなるのか、殺されるのではないか、いや捕虜として監獄へぶち込まれるのではないかなどと、いらだちとその不安感は高まるばかりであった。

この十一日間の戦闘はいったい何だったのだろうか。停戦も知らずに、ただ黙々と死んでいった戦友は、結果的に無駄死にをしたことにならないか。そんな戦友の悔しさ、無念さを思った時、どこへも持っていきようもない怒りが込み上げてきた。

ソ連軍の参戦と同時に、札幌の北部軍司令部より八八師団の樺太撤退を指示してきたが、峰木師団長は「奥地に居る邦人が無事に本土に引き揚げるまでは、軍は撤退できない」と答え、一刻も早く国境でソ連軍の南下を阻止しなければ、邦人がソ連軍の戦車のキャタピラに蹂躙（じゅうりん）されると、国境線でソ連軍の阻止を命令した。

「積極的な攻撃はしてはいけない。自衛戦闘に止めよ」という、軍司令部命令の戦史にもないような悲劇の戦闘であった。

今次の国境戦において、わが第一大隊ほど不運な戦闘を強いられた部隊はなかったであろう。大隊長と副官は戦死、各中隊長も全員戦死、軍医、将校、のほとんども戦死、各中隊とも壊滅に近い状態であった。

二万という装備の整ったソ連軍を向こうに回して、わが連隊が苦闘している時、札幌の軍司令部では樺太への救援出動に着々と手は打たれていたらしい。北海道の第七師団から歩兵三個大隊、砲兵一個大隊を基幹とする部隊が出動準備を終えて、いつでも出動できる態勢になっていた。

航空隊も持てる戦力を総動員し、樺太作戦に第一飛行師団を出動させることにし、竹田中佐指揮の隼戦闘機二十四機が札幌の飛行場を離陸した。ところが海上が一面の厚い雨雲に覆われ、全く視界がきかないことから攻撃を断念し基地に引き返した。翌十五日には戦闘機と攻撃機が再び樺太国境に向かったが、この日も宗谷海峡は暗雲に閉ざされていて基地に引き返すことになった。そして当日の昼、終戦の玉音放送によって陸空からの援軍作戦は中止になったらしい。

ついに北海道からの援軍は来なかった。わが軍の国境の戦力は一個連隊にも満たないものであった。その上、近代戦に欠かすことができない航空機や戦車

の支援もなく、格段に装備の劣るわが軍が、近代的な装備を誇る二万のソ連軍を、国境近くに十日間も食い止めたことは、防御戦闘としては特筆に値するものであろう。

〈北樺太の収容所で、私達と戦ったことのあるソ連兵が日本には飛行機も戦車も無いのか、と不思議そうな顔をして聞いてきたことがある。全くその通りで近代兵器などは何も無い戦いだった。あと一日停戦が遅れていたら、連隊全員が敵陣へ一斉突撃をして玉砕し、アッツ島同様の悲劇の連隊となるところであった〉

朝五時頃、連隊の兵器と弾薬の集積を完了した。私の残りの小銃弾は僅か十発だった。小銃とゴボウ剣（銃剣）は赤く錆び付いていたが、この鉄砲が私を今日まで守っていてくれたと思うと急に愛着が湧いてきた。手ぬぐいできれいに汚れを拭き取り天幕の上に置いた。

私達は万一のことを考え、各人がそれぞれ手りゅう弾を一発ずつ隠し持っていた。いざという時にはこれを胸に抱き、敵を道連れにして自爆しようと皆真剣に考えていた。

午前十時、八方山の軍道上に集結し、出発の命令とともに二列縦列で山を下り古屯に向かった。ソ連兵が自動小銃を持ち、道の両側に五メートル間隔くらいで立っている。

服装を見ると、油で汚れたようなきたない粗末な軍服を着ている者もいれば、真夏だというのに、綿入れの厚いジャンバーを着ている者もいる。しかし、特別に私達を憎しみの目では見てはいないようだ。しばらく行くとソ連軍の将校が五、六人立っていたが、こちらの方は服装は悪くはない。紙巻タバコ（パピロス）を手に持っていて、

「タバコをどうぞ、どうぞ・・」

と言っているらしいが、誰も手を出さない。そこで私が思い切って手を出したら、ニコニコしながらタバコに火をつけてくれた。日本語で、

「どうもありがとう」

と言ったら、言葉の意味が通じたらしく、手を差しのべて握手を求めてきた。温かい大きな手だった。これで私の心の奥底にある、ソ連兵に対する警戒感と不安感がいくらか薄らいできたようだ。これを見て戦友の山家もタバコを貰って、陸軍のタバコの『ほまれ』より上等だ、などと冗談も出るようになってきた。

やがて山道を下って中央軍道に出た。師走陣地の北の亜界川近くではないかと思われる。

←中央軍道　距離は国境に至る約二五〇キロメートル、幅五～六メートルの馬車道だが、樺太を縦貫する最重要の交通路であった。

しばらく行ったら師走陣地の側溝に、真新しい上等兵の階級章を付けた兵隊が仰向けに倒れていた。真夏の太陽に連日焼かれて顔はチョコレート色に変色し、その顔も半分は白骨化している。軍服の裾がめくれてズボンのバンドが見えている。その時、思わずハッとした。そのバンドには見覚えがあった。厚手の白布六センチくらいの幅のバンドで、金具も手製の独特のもので、すぐに四中隊に転属して行った中島上等兵のものだと分かったが、ソ連兵は近寄ることを許さなかった。

彼は私と同じ元二中隊だった。隣町の余市町の出身で職業は理容師だと言っていた。炊事勤務で一緒になり、するめやリンゴを分け合って食べた親しい仲だった。故国へ無事に帰ることができたら、君の家族へ立派な最後を遂げたことを報告するから、安らかに眠ってくれと心の中で手を合わせ後ろ髪を引かれる思いでその場を離れた。

――続く――

秋風の立つ

瀧内優子

もみぢ葉の散りつぐ前山の山肌の見えくる夕べ風騒ぎ立てる

水の面に吹かれて落つる群萩の花のくれなゐただよひやまず

秋ふかむ流れにそそぎ遠き光りおとろへ清きひかりと思ふ

芒穂の中ほど折れば音にたつ秋一握り持ち帰り来ぬ

こころ澄む寂けき宵を亡夫を偲びて庭の草生に虫の声聴く

身障の籠りがちなる亡夫と来し秋野の風の草生と花と

吹かれゐる芒の穂こそかなしけれ夕されば記憶の原に風たちぬ

ひそやかに後につき来る気配して振り向けば風が落葉を運ぶ

峡すでに暮色となりてたつ風にぐみの葉裏は白く打ち合ふ

雨やまぬ庭草の中に鳴きてゐる虫聞きとめて秋の夜長を

編集雑記

▽今年の月別の暦もとうとう残すところ一枚になってしまいました。暦を見ると二十四節季（昔の中国でつくられた季節の区分法で、一年を等分に二十四に分けていて、一ヵ年の季節の移り変わりを知るように考えられたものです）の大雪（たいせつ）と冬至とあります。北海道ではいよいよ冬本番というところですが、考えてみると冬至は一年で昼の最も短い日ですから、年賀状の言葉にも見かける「一陽来復」で、これからは日脚ものびてきます。と、言ってみても実感とは大分かけ離れてはいるようです。

▽実りの秋も過ぎてしまいましたが、ふと考えることがあります。くだもの＝果実にくさかんむりがないのに、お菓子の菓にはくさかんむりがあります。これは逆ではないかと思うのですが、どこかで入れ替わったようです。

昔といってもず～っと昔、当時、おやつといってもおそらくそれは果実類であったでしょう。ところが中国あたりから穀物を粉にして作っただんご・せんべいなどが渡ってきて、いつの間にかこっちがおやつ＝お菓子に替わってしまったようです。それがお菓子にくさかんむりがつくようになった理由？

▽いよいよ師走―そして新年には「日記」をと意気込む人もいることでしょう。

これは江戸時代のある武士の話ですが、『残念記』という日記帳をつくり、これにはその日にあった自分の過ち（あやまち）を書きとめておいたそうです。ところが一日を反省すると過ちが多すぎて、とても書き切れなくなってしまいました。そこで今度はうまくいったこと、よいことだけを書きとめておこうとしたら、何も書くことがなくて毎日が空欄ばかりでした。

これでは日記にはならないと考え直し、思いのままに、とりとめのないことを気ままに書くことにしたそうです。

こうしてみると、高野名幸作さんの五〇年も続いた日記の価値がよーくわかります。

悠

雑詠［十二月号］

主宰　水見壽男

寄せ返す波の音にも今朝の秋　山口悦子
新涼や妻の立居のいそいそと
新盆の黒き奥津城弟眠る
秋立つも杖のリハビリ遅々として
盆の月郷の墓みな海を向き　越野敏雄
大空の満天の星祭かな
墓参寺院の鐘に夕日映え
西瓜畑みづみづしくも蔓ものび
山道を越え新涼に辿りつき　高橋重子
渓流の音に目覚めし宿の秋
星月夜ニセコ連山浮き立ちて
海鳴りが海鳴りを呼ぶ島の秋

【句評】

今朝の秋波水平の岬かな　室谷弘子
霧晴れて忽と一湾息づけり
月天心隈なく照らす日本海
菩提寺の大本堂や秋の風
語部が少なくなりて原爆忌　外山俊久
十勝野の花の絨緞店高し
キャンバスに青無限なり秋の空
高原はすでに秋めく白き風
海の色失せて秋立つ空の色　渡辺嘉之
唐突に岬を越えて秋来る
流れ来て秋立つ雲でありにけり
朝刊に秋立つ色の刷られ来し

【句評】

稲妻の荒ぶ夜空の岬かな　堀典子
甲板に鳴く秋いかや朝の波止
大海の音こぼれ来る秋涼し
潮さして秋めく礁波高し
海図にて秋の広さを測りけり

【句評】

岬鼻に深まる海霧の迅さかな　本間寿昭
墓誌の文字若き仏や墓洗ふ
満月や夜目にも近く雄冬岬
蛇行する川一条の滝を呑む　越野清治
灯台の夕風涼し日矢降りて
どの岬も潮満ち満つや雲の峰
初秋や野草の匂ひなつかしき
雲影や古平湾の夏深し

× × ×

■北海道新聞『日曜文芸』　高橋笛美選

越後より継がれし浜の盆踊り　渡辺嘉之
納屋にある漁具の匂ひや秋暑し　本間寿昭

古平俳句会

怒濤

【一七】
―一二月号―

島一つ靄のかげより実玫瑰　越野清治
秋風の統ぶ海原の平らかに
一と呼吸おいて又鳴る鳥威　斉藤波留
石狩の実の玫瑰や句碑親し
名月や法螺貝を背に山の僧　山口悦子
人群れて熊野古道や竹の春
ななかまど海一望の喫茶店　越野敏雄
秋の風湖の浮舟さざめきぬ
初漁のいずし用とし鮭届く　大和田絵伊
佛事の多き八月の過ぎ易し
トンネルを抜けて紅葉天を突く　高橋重子
帰りみち一人に岬の秋夕焼
深山晴峰より秋の声を見ゆ　本間寿昭
石仏を撫で行く子等に末枯るる
残菊の意地を見せたる色香かな　室谷弘子
麦秋の風に乗り来し大漁船
居酒屋のあれやこれやの秋を喰ふ　外山俊久
音もなく小雨降り来る秋の声
とどまりて躓くことも秋の風　渡辺嘉之
秋晴て海の底まで空の色
秋の日や沈みゆく色一途なる　堀　典子
訛りある言葉やさしや里の秋
秋天の里に近づく雲白し　仲谷比呂古
雲低し潮盛り上がり秋暑し

短歌

古平町岬短歌会

麻痺の友が作りし小袋いただきぬよそゆきとして大切にせむ
池田　テル

群れ遊ぶエノコロ草に秋を観る秋風受けてそそと生きをり
金子　寿子

クラス会解散と告げ別れたる優しき笑顔の友は逝きます
坂本　信子

山の上の十三夜の月仰ぎつつポストまで行くまはり道して
鈴木　時子

樹海の葉秋の衣を身にまとひ次の季節をゆっくり待てり
田中　香苗

大時化の高波つぎつぎ迫り来て波の花あまた湧きて飛び散る
丹後　初江

竿に乾すシーツに花影ゆれてをり我が丹精のサルビアの花
東　美知

低気圧のあれて飛沫を上げる波防波堤こえ港にとよむ
堀　典子

俳句

古平俳句会

爽やかに卒寿の坂を二つ越え　斉藤波留

熊野路のホテルに夫と良夜かな　山口悦子

舫船さざめく波に秋の声　越野敏雄

水割も銚子なつかし秋天下　大和田絵伊

秋暮るる齢を忘れて遠出せり　高橋重子

山里をうめつくしたる草紅葉　仲谷比呂古

うそ寒や打ち寄す波のやや荒し　室谷弘子

あてもなく歩いてみたし秋日和　外山俊久

朝寒の尖る波音雲を刺す　渡辺嘉之

薄紅葉うす日の差して色立てり　堀　典子

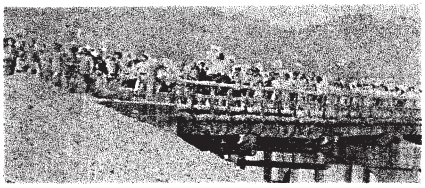
連峰に雲の浮き波秋惜しむ　本間寿昭

石狩の句碑に和みし実玖瑰　越野清治

古平町史年表

昭和27年（1952）　～続き

★古平小学校創立七十七周年記念式と祝賀会が行われ、児童や教員、ＰＴＡ役員らが旗行列を行う
▲台風２９号の襲来（5／13～14）により古平川が氾濫し堤防が決壊、大規模な改修工事が着工される
★禅源寺納骨堂（種田家）が落成する
▲「石狩湾底曳漁業禁止区域拡大漁民大会」が、古平・美国両町で開かれる
▲古平港湾整備計画の最終案がまとまる
▲北海道余市高等学校古平分校が道教委告示により独立して、北海道古平高等学校と改称する
▲稲倉石小・中学校校舎の上棟式が行われる
▲金融機関関係の貢献により、梅野富蔵が緑綬褒章を受章する
▲丸山町に建設中の復興住宅が完成する
▲古平信用金庫で盗難事件があったが、犯人は間もなく逮捕される
★六志内開拓（パイロットファーム）の鍬入れ式が行われる
▲古平町船入澗出張所が竣功する
▲準地方費道であった入舛～岩内線が、道路法の改正で道道に認定される

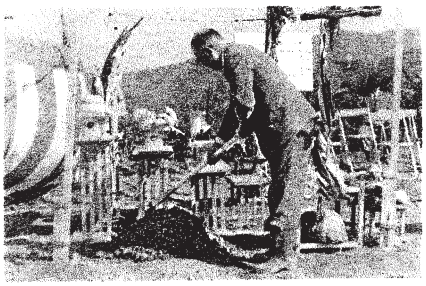

↑古平橋を渡る児童らの旗行列

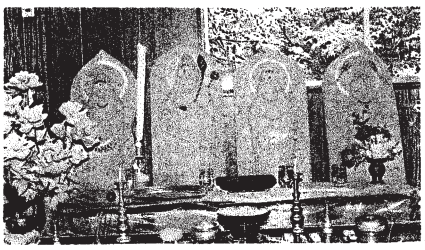
↑開校七十七周年記念学芸会

↑種田家の納骨堂と灯籠

昭和28年（1953）

▲納税貯蓄組合設立の説明懇談会が開かれる
▲古平小学校の２名の児童が、古平川で溺れている幼女を救助する
▲道道小樽～江差線が道路法の改正により、道道から２級国道・229線に指定される
▲古平町に凶漁対策産業振興委員会が発足する
▲浜町恵比須神社で賽銭箱が壊され賽銭が盗まれる
▲稲倉石小中学校校舎落成式と祝賀会が行われる
▲古平町開基８５周年記念行事が、凶漁のため延期することについて協議され、翌29年実施と決まる
★チョペタンの沢に青山雅雄が観音堂を建て、観音像の入仏式が行われる


↑六志内開発くわ入れ式


↑青山観音（正隆寺地蔵堂）